



かわい 河合

はら 隼雄

文化庁長官

最近では思春期の子供の暗い事件が続き、日本の社会全体が不安と閉塞感で満たされているような印象を受ける。

長崎の事件にしても、「もしも自分の子が被害者になったら」という不安より、「自分の子も加害者になるのではないか」という不安をもつ人がはるかに多く、臨床心理士のところに相談に来る人が目立つ。

確かに、事件は陰惨である。しかし、日本中の親が我が子に対してここまで強い不安を抱くということにも大きな問題を感ずる。これには多くの要因があるが、一つ注目すべきこととして、我が国の報道の傾向が最近

は暗い方に傾きすぎ、明るい面を忘れたり無視したりして、それが日本人全体の不安を不必要に高めているという面があるよ

きとした高校生の姿にじかに接してきたからである。全国高等学校総合文化祭は毎年八月上旬、各県の持ちまわりで行われる、実に多彩な芸術文化活動の発表会である。文化のインターハイ、文化の甲子園とも呼ばれる。芸術文化活動に力を注いでいる高校生にとって、年に一度の晴れ舞台であり、こ

じが伝わってきて実に微笑まじい。舞台裏に行くところでも裏方の高校生が活躍している。話にはすべて手話通訳がつくので、手話クラブの生徒さんたちが必死で練習している。舞台裏の緊張感というのは、私は大好きだが、これらすべてを高校生がきびきびと取り仕切ってい

るし、思いがけない力を発揮するのだ。開会式は素晴らしい。韓国や米国からの参加があり、音楽も踊りも司会もすべて上々。「心の泉より湧き出る文化よ、大河となり海を成せ」のテーマどおりの展開であった。真剣な高校生の姿を見て、私は何度もしーんとなるものを感じた。

青少年の健全育成に関心を持つ企業のどこかがスポンサーになって、テレビで全国高等学校総合文化祭のドキュメンタリーを放送してはどうか。大会開催に至るまでの主催県の高校生の努力などを記録してみることだろう。

高校生の活躍も報道して

論点

うに思われる。十代の子供たちの暗い面のみがマスコミの表に出過ぎていないだろうか。こんなことを考えるのも、実は、最近福井で行われた全国高等学校総合文化祭

に出席して、生き生きに参加することは、まさに文化の甲子園出場なのである。この大会の特徴の一つは、すべて高校生の主体的な企画と運営によって行われていることである。私は文化庁長官として開

会式に参列したが、会場到着時に出迎え、案内はすべて高校生である。言葉遣いも丁寧だし礼儀正しいが、一生懸命という感

を越えて、生徒は結構上手にやるところで、これらはどれほど報道されただろう。地元の福井新聞をはじめ他の新聞にも少しは出たようだ。しかし私は、高校生のこの生き生きした姿を映像で写して欲しいのだ。テレビでこの総合文化祭で活躍する高校生の姿を全国に流せば、日本中の親たちの気分も変わるに違いない。

専門は臨床心理学。「子どもと悪」「子どもと学校」など著書多数。75歳。